

万葉の歌

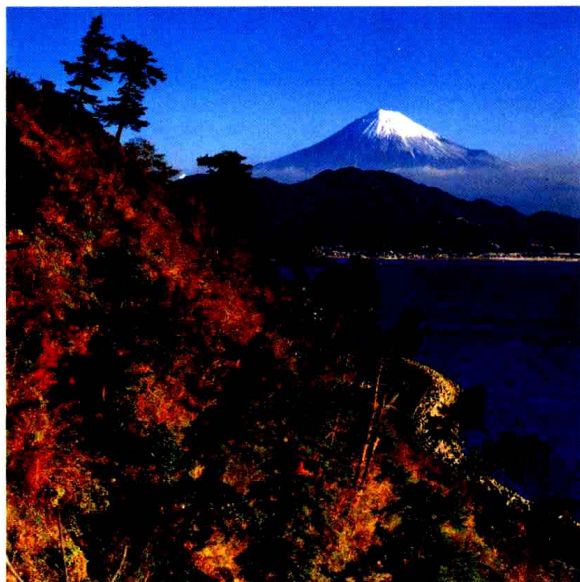
12

人と風土

中西進企画

加藤静雄著

東海



保育社

人と風土

中西進企画

同朋大学教授

加藤静雄著

万葉の歌

12

東海

保育社

万葉の歌—人と風土— ⑫ 東海

昭和61年 3 月20日 印刷 定価 1,400円

昭和61年 3 月31日 発行

著 者 加 藤 静 雄
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町 1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚1-1-2

印刷 / セブン印刷株式会社

用紙 / 日本加工製紙株式会社

© 1986 加藤静雄

落丁本・乱丁本はお取り
替えいたします

ISBN4-586-70012-2 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN

(NDC 910.8)

序

遠く時間を隔てた、万葉の人々の歌声は、私たちに、時間のその長さを感じさせない生命力をもって迫ってくる。万葉の人々の生きた、時代の厳しさが、彼らに妥協を許さない、のつぴきならない言葉を与えたからである。

日常性の中に埋没し、それに流されて、美しいものも美しいと見ることのできる機会のきわめて少ない現代のわれわれは、万葉人の歌声の中に、われわれの失ってはならない「心」を見付けることが出来るであろうとは、筆者のつねづね思っていることである。万葉の生命力がそれをさせるのである。

恋も旅も文学も、非日常の世界のものである。だが、人々にこの非日常の世界がなければ、ただ「生きている」だけの存在に墮してしまふであろう。われわれは万葉の世界に遊ぼうではないか。そして、そこに生きた人々の心的一端に触れてみようでは

ないか。

万葉の歌は、幸いにわれわれのそれぞれが生活している土地に詠まれたものも多い。その土地にたつて、千三百年の昔を思いやることは、心豊かなことではないか。そして、彼らの歌は、私たちが心のそこに無意識にもっている「何か」に、秘やかに語りかけてくるだろう。そして、その姿をあらわしてくる「何か」は、私たちがきつと求めていたはずのものにちがいない。

東海の万葉の歌は、地理的な位置に恵まれていて、バラエティーに富んだ四千五百の万葉の歌の中から、歌った人々の階層も幅広く見出すこともでき、したがってその歌われた感情も感覚も、それぞれに特徴をもつものを見ることが出来る。筆者はそれをできうる限り読者に示そうとした。また、筆者はつねづね「一首でも愛誦する歌を万葉に見出していただければ、その人は立派な万葉の愛読者である」と考えている。この心をもつて本書を書いた。意の尽くさないところは筆者の力の及ばないところである。読者の温かい寛容な心に、本書を読みとっていただければ幸いである。



我が背子は

いづく行くらむ

沖つ藻の

名張の山を

今日か越ゆらむ

当麻呂の妻（巻二―四三）

名張の山（三重県）

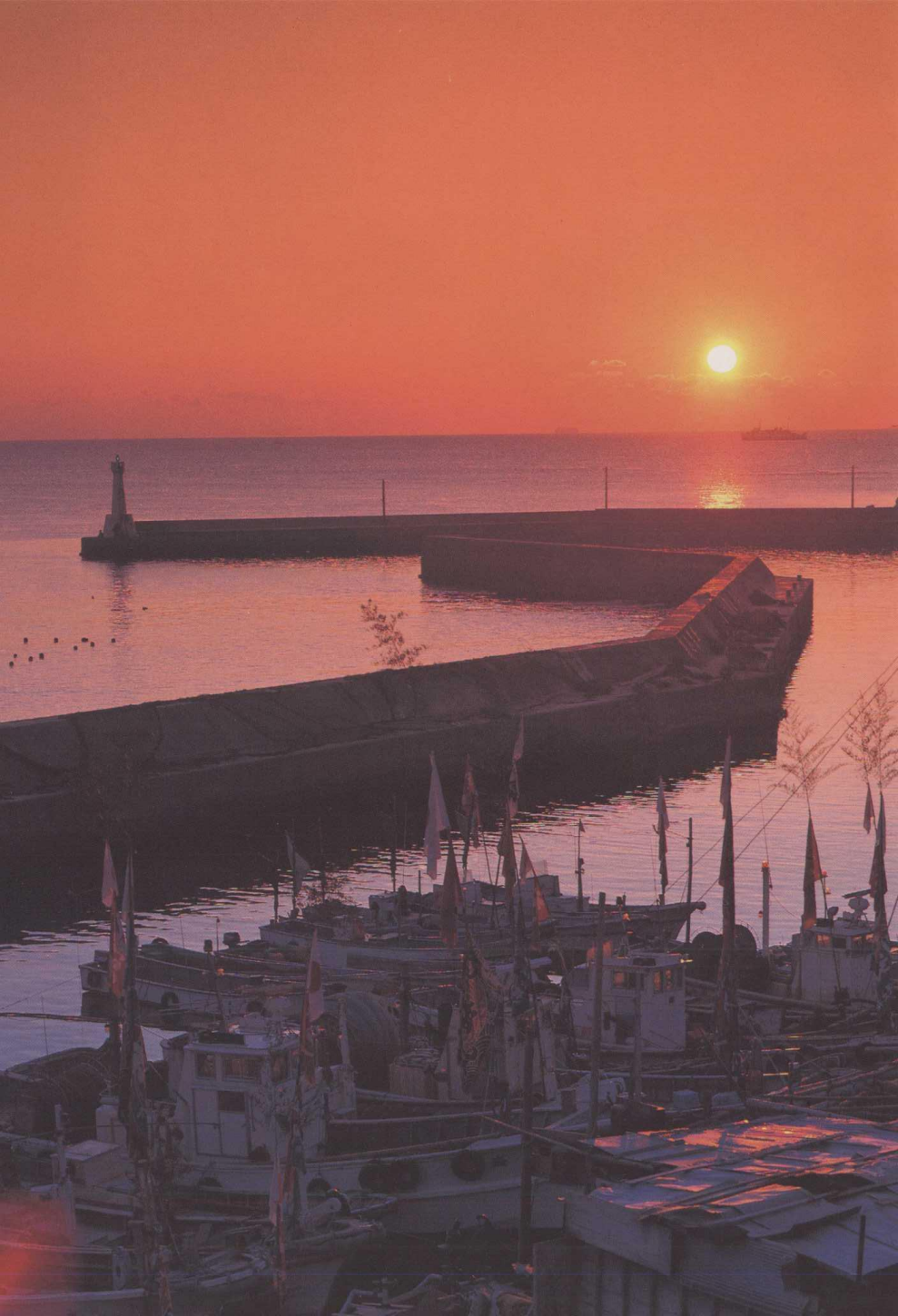
ますらをの さつ矢たばさみ
立ち向かひ
射る^{まとかた}的形は
見るにさやけし

舎人^{とねりのをとめ}娘子（巻一―六二）



まとかた
的形の浦（三重県）







菅島より見た伊勢の海(三重県)

▶ 答志島たしじまの日の出(三重県)

伊勢の海の

磯いそもとどろに

寄する波

恐かしこき人に

恋ひ渡るかも

笠女かさのいらつめ郎

(巻四一六〇〇)



しのじま

篠島より神島(中央)と伊良湖(左)を望む(愛知県)

夢^{いめ}のみに

継^つぎて見えつつ

小^し竹^{のしま}島の

磯越す波の

しくしく思ほゆ

(巻七―二三六)



篠島にて(愛知県)





ひき ま
引馬神社境内(愛知県)

伊良湖岬の夕陽(愛知県)

ひくまの
引馬野に

にほふ榛原
はりはら

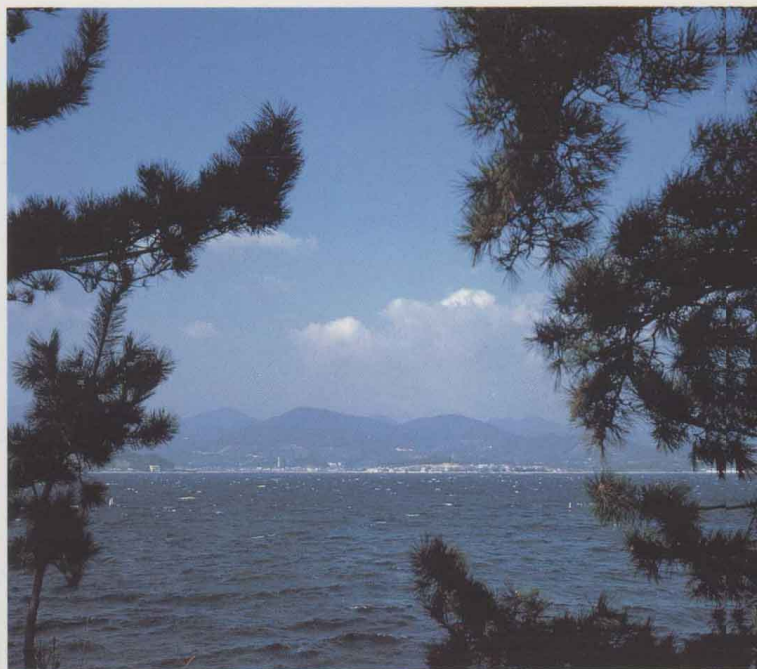
入り乱れ

ころも
衣にははせ

旅のしるしに

ながのおきまろ
長奥麻呂

(巻一―五七)



浜名湖畔大崎より板築山(乎那の峰)を望む(静岡県)

遠江 引佐細江の水脈つくし
 我を頼めて あさましものを

(卷十四—三四二九)



いなきほろえ
引佐細江(静岡県)



あべがわ
安倍川河口(静岡県)